

元ノーパンクリ責めカフェ店員ですが、元いじめっ子の旦那様の計算ずくの狂愛溺愛に、心も体も完堕ちさせられました
サンプル（一部抜粋）

「ご主人様、詩織の雑魚クリいじめてください…っ」

ノーパンクリ責めカフェで働いていた頃、よく口にしていた決まり文句。
そこで再会してしまった、人生で一番大嫌いな元いじめっこの桐生理久。

あれからもう1年が経とうとしてるのね。

あの後、本当に違約金も何もかも理久がなんとかしてくれて、全てを片付けてくれた。支払わなきゃいけないお金も、本当に何もかも…。

まあ…引き換えに、あの再会の翌日に本当に籍を入れる事になったんだけど…。

…まさか1年後に…こんなにも寂しい思いをしているなんて、想像もしていなかったな。

（中略）

何度も何度も低い声で囁かれる愛の言葉。

鼓膜を震わせるその声と、甘い高級な香り。ぎゅっと苦しくなるくらい、抱きしめてくれる力

の強さ…。

ちゅっ…くちゅっ…♡と舌を絡めとる淫らな音と感覚。

まだ外が明るいうちから、私を逃がさないように後頭部に手を添え、舌をねじ込まれる。私は理久の舌に応えるように、自分の舌を絡める。

「んっ、は…あっ、んん…」

愛は一方的だけど、私は受け取るだけ…その重さに沈んでいく。

「理久…っ…」

「ん。」

そつと頬を撫で、首筋にキスをし、服を脱がされる。

「あそこだと詩織の全部が見れなかったから。」

理久はいつもそう言いながら、ゆっくりとブラを外し、乳首の周りをぞわつと甘く撫でる。

「は…あっ…」

もどかしくて、調教されたクリとおまんこが熱く湿っていく。

「理久…早くっ…」

「せっかちなな。」

「だって…」

「こんなに乳首を勃てて。」

これで俺の事が嫌いだなんで、説得力にかけな。」
クスクスと笑いながら、ぎゅむっと乳首をつままれる。

「ひう…っ、あ、あ…っ、嫌い…だもん…っ」

「そっか。」

長い舌を出し、乳首をごりごりと舐められる。

「あ、あ…っ、吸ってっ…」

もどかしい乳首に、血流が集まるように…ビンビンに勃起して早く刺激がほしくなる。

理久は私のおねだりに心底嬉しそうに目尻を下げて微笑み、そのままじゅるじゅるとえっちな音を立てて、乳首を吸いあげる。

「は、あ、ああ…っ、きもち…い…っ」

乳首を吸って舐めてゴリゴリしてくれる理久。わずかに胸に触れる柔らかい髪を、そっと撫で…もっと刺激を与えてもらう為に、胸を突き出してよがる。

「詩織、腰動いてる。」

「っ、だって…っ」

「クリ、触ってほしい？」

「……うん…っ」

「えっちの時は素直だな。可愛い。」

クスクス笑いながらお腹を撫で、下半身へと理久の指が伸びていく。

（中略）

いつまでも……こんな日常が続くと信じていた。

だけど結婚から9ヵ月が過ぎた頃、状況が変わった。

始まりは理久が正式に社長に就任した事だった。

「しばらく帰りが遅くなるかも。色々と改革したいこともあってな。」

数一つないスーツを身にまとい、高級そうなネクタイをしつかりと締める。

理久はその日から、あまり家に帰ってこなくなった。

きつと本当に仕事が忙しいんだろうと思う。

深夜に帰ってきて、お風呂に入り…泥のように眠っていたから。

「詩織、ただいま。」

「おかえりなさい。」

会話はそれだけ。接触はお帰りの軽いキスだけ…。

土日すらも仕事で、二人の時間どころか会話もほぼ無く、私は弟と過ごす家に居る時間が長くなっていた。

（中略）

「あ、ごめん…。起こしちゃった…？」

ビクツとして慌てて理久の首筋から顔を離す。

「ん……。どうした？」

「……おかえりって最近言えてないから……帰ってるか見に来ただけ……」

「そっか……」

「うん……」

理久は私の顔をチラッと見て、一瞬目を逸らす。

「……？」

「はあ……」

理久は片手で顔を覆い、小さく息を吐く。

「どうか……した？」

繋いだ手があったかい。このまま抱きしめてくれたらいいのに……。

心のどこかでそう思いながら、繋いだ手に力を込める。

だけど……

「……えっちしたくて来たんだろ。」

って冷たく低い声が寝室に響いた。

どこか面倒くさそうに聞こえる声色……。手で隠しているせいで表情は見えないけれど……、口角

はわずかに下がっている。

「え……？」

ズキンと心が痛むのを感じながら、少し震える声で聞き返す。

「もう2ヵ月シてないもんな。」

「……」

「はあ……イけば満足する？」

「……え？」

「一回でいい？」

明日からしばらく帰ってこれないし、サクッと終わらせるか。」

心底めんどくさそうな言い方……。セックスが義務みたいな、しょうがないからやっておくか……みたいに聞こえる。

「……なに、その言い方……」

「隠さなくていいよ。」

嫌いな相手に会いに来るくらい、欲求不満だったんだろ？

相手にしてやるよって言ってるんだよ。ただ疲れてるから1回で勘弁して。」

ギシッと身体を起こし、スッとシャツを脱ぐ理久。

引き締まった身体、私を見下ろす目……。

愛なんて微塵も感じない…。この2ヵ月で理久に何があったの…？

前はあんなに大切に、狂うくらい愛してくれたのに…。

当たり前のように与えられていた愛が、いきなり0になったみたい…。

「ほら、詩織も早く脱いで。」

短く、ため息混じりに吐かれる言葉。

「理久…。」

「なに？」

「……私の事、嫌いになった……？」

「いや、嫌いになんてならないよ。」

まっすぐに目を見て、表情一つ変えずに言葉を紡ぐ。

高校時代に戻ったかのような冷たさに、心がぎゅっと掴まれたように痛い。

「じゃあなんで…抱きしめてくれないの…？」

鼻がツンとして、視界が滲む。なんで涙が溢れてくるのか、自分でも分からない。

「…抱きしめれば満足？」

理久は強引に繋いだ手を引き寄せ、私を抱きしめようとする。

違う…。違う…。

私は理久の手を振り払って、首を静かに横に振った。

「……はあ。」

理久はため息をついて、私の目をまっすぐに見る。

「違う……。」

「何が。」

あんなに大切そうに抱きしめてくれたのに。愛してるよって何度も何度も言ってくれたのに……。強引なのに優しく、息が出来ないほどに抱きしめてくれたのに。過去の幸せなハグを思い出して、スーッと静かに頬に涙が流れる。

（中略）

「…雑魚。」

くすっと笑いながら理久は容赦なく、じゅるじゅるとクリを吸い、舌でクリの根本の芯をこりこりと擦る。

「おおああ、イ、ぐ…ぐぐ、んおおあああつつつつ!!」

身体をのけぞらせ、幸せと快感の涙を流し、痙攣する。

「こらこら。上に逃げようとしちゃだめだよ。」

逃がすわけないんだから。」

理久は私の腰をグッと掴み、逃がさないように固定した状態でクリをぬちゅ♡ぐちゅ♡と音を立てて舐め続ける。

「イってる、からああ、や、ああああああっっ!!」
顔をゆがめ、涙を流す。どうしよう。おかしくなっちゃう。

可愛い声を出したいのに…。こんな野生動物みたいな絶叫を響かせたいわけじゃないのに、我慢できない…。余裕だってない。

「ひ…理久…うう、んあああ、ゆる…して、もお…イケな…いっっっ!!」

イってもイっても追い込まれ、今までの葛藤も辛さも何もかもが頭の中からパンツとはじけた。
「…ずっとおまんこヒクヒクしてる。

中から愛液を垂らして…可哀想に。」

「ひ…あ、あ、だめ…だめ…」

うわ言のように言葉を口から垂れ流し、フルフルと首を小さく横に振る事しかない。

「安心して。中も犯してあげるから。」

理久の低い声とともにぐじゅ♡とおまんこに指が侵入してくる…。

そして私が弱い、浅い場所を上にくりつと指で押し上げられた瞬間、

「ぐ、う、あ…あ、あッ」

うめき声と共に、ぶしゃつと潮を吹いてしまった。

「すごいな。相当限界だったんだね。」

理久の優しい声に溶けていきそう…。

「理久……」

「ん？」

「指……、動かしちゃだめっ……」

本当に壊れてしまう。敏感になり過ぎて、理久に触れられる場所が全部性感帯になっていくような不思議な感覚。

もうこれ以上は怖くて、どうなるのかも分からなくて……泣きながら必死でそう口にした。

けどその瞬間、ぐじゅ♡ぐじゅ♡と激しい音を立てて理久の指が動き始めた。

「ひ……ぎ、あああああ♡だめ、だめえっ、ふっ♡♡♡」

ブシャ……ブシャ……♡と潮が吹き出す音がする……。身体は敏感になり過ぎて、熱くて訳がわからない。

「ごめん、聞こえなかった。」

クスクスとからかうように笑う理久は、ぐりっ♡と浅い場所をトントンと押し上げ、反対の手でクリをむき出しにしてゴリゴリと擦り始めた。

（完堕ちまでの狂愛×溺愛調教の全容は製品版にて）